

# 史遊会通信

No.246号  
平成27年  
10月10日

編集  
042-754-9360  
arai-hiroshi@  
jcom.home.ne.jp  
新井宏

## 九月講演後記

### 蘇我倉氏の一族

隆 恵

本稿は、講演要旨ではなく講演後記とさせて頂くことを、冒頭にお断りしたい。

理由は、年表・地図・系図などの参考資料が技術的な点で掲載できないので、ご理解頂けない事と、講演では十分に語れなかった事を追加説明したいからである。

先ず、一般的に我々が陥りやすい間違いを二、三お話ししたい。

即ち、(中国人はとかくこう言う民族だ)と十三億の多民族国家の国を十羽一絡げに断定したりする。この判断の全てが間違いだとは言えないが、六十ほどの民族の集合体であり、

漢民族は一つながらも広大な国土の東西南北や沿岸部と山岳部との違い、今日では地域的な貧富の格差等々、この複雑な巨大国家の人々を一つの物差しで決めつける事は間違いである。日本人はとかくこの傾向が強いとある中国の知識人が言っていた。

また別の話となるが、六世紀の仏教伝来によりその外来宗教を認めるかどうかで蘇我氏と物部氏が最後は生存をかけた壮絶な戦いとなり、蘇我馬子が戦勝し物部守屋は戦死する。

但し、この戦争で物部氏の全部族が滅亡したと即断をしてはいけない。この蘇我物部戦争で敗北したのは物部守屋を当主とする物部

例会のお知らせ

◎ 十月例会

日時 十月十七日(土)午後三時～五時

会場 銀座ルノアール貸会議室三階六号

講演 森下 征二氏

テーマ 天智玉 先月号に紹介記事あり

十一月号自由執筆 平山善之、隆 恵、

藤田隆彦の諸氏 締切十月末

◎ 十一月例会

日時 十一月二十八日(土)

午後四時三十分～六時三十分

先月号の行事計画表では十一月二十一日(土)

となっておりますが、月日・時間共に変更にな

りましたので「注意下さい」。

会場 銀座ルノアール貸会議室三階六号

テーマ 地政学・ポーランドと韓国

講演(新井宏氏) 討論司会(隆恵氏)

十二月号自由執筆 「今年感動した本」

全員(友の会も含む)

字数 20字75行目安 締切十一月末

氏とそれに近い氏族であり、それに加担しなかつた物部氏は生き残り、後世も活躍している。

六四五年の乙巳の変で蘇我氏の蝦夷・入鹿の宗家は滅亡するが、分家の蘇我倉麻呂の一族は生き延びる。宗家が滅亡したので分家は細々と生き延びたと誤解しがちだが、「蘇我氏倉家」は分家のイメージとは違って、宗家に對抗できるだけの財力を持っていた「蘇我倉氏」と言っても良いほどの大豪族だったと問題提起するのが本講演の趣旨である。

蘇我氏宗家とは稲目・馬子・蝦夷・入鹿を指すが、蘇我倉氏は馬子の息子の倉麻呂を始祖とし、その子孫が乙巳の変にも関与し、その後の孝徳朝・斉明朝・天智朝の重臣に栄達し、姫たちは天智や天武の妃となり、宗家に代わって繁栄する。

天皇の妃となった姫たちだけでなく、そのうちの一人の姫が藤原不比等の正室になり、生まれる三人の男子が有名な藤原四家を起こして、後々千年以上も続く藤原氏の大栄華を齎し、その子孫たちは天皇の外戚となって皇統に血統を繋いで行く。

( 蘇我の姓氏 )

「蘇我」氏の姓氏は全く独特の苗字である。曾我兄弟等の「曾我」はよく見かけるが、「蘇我」は蘇我氏か千葉の総武線の駅名の蘇我駅しか目にしない、

そこで「蘇」を調べると、およそ姓氏には使いたくない縁起の悪い文字と分かった。

元々古代中国の中華思想を反映した文字で、周辺の異民族に対する蔑称として使った文字である。その意味は(魚が腐った嫌な匂い)であり、魏志倭人伝の邪馬台国の三〇か国の中に「對蘇」国、「蘇奴」国がある。

ご承知の通り、古代中国は周辺国の国名に「耶<sub>二</sub>よ<sub>一</sub>こしまな」、「奴<sub>二</sub>い<sub>一</sub>やしい」、「卑<sub>二</sub>い<sub>一</sub>やしい」、「夷<sub>二</sub>野蛮<sub>一</sub>な」、「倭<sub>二</sub>従順<sub>一</sub>、小人」、「蛮<sub>二</sub>下品<sub>一</sub>で野蛮」等々数多くの蔑称の漢字を当てていた。

例えば、(邪馬台国の卑弥呼)とは(よこしまな国の卑しい女)を意味する。我々が(彼女こそ我が国の初代の大王だ)と現代の中国人に言うとき、(日本人は何と謙虚な民族だな、しかし度が過ぎてアホと違うか)と嘲笑されるであろう。もう一つ例示すると、イエス・キリストを「耶蘇」と言うが、その意味は「よこしまで、鼻を塞ぎたくなる嫌な奴」の意味で

ある。「耶蘇教」は清や中国共産党、李氏朝鮮王朝、江戸幕府と初期の明治政府からトコト嫌われた。

( 蘇我蝦夷と乙巳の変 )

さて本論に戻ると、「蘇我」氏の意味は(鼻を塞ぎたくなるほど嫌な我)となる訳で、こんな恥さらしの姓氏を名乗る馬鹿はいない。

もう一つ「蝦夷」の名前の意味であるが、言うまでもなく(野蛮なえびす、蝦夷とはアイヌ人で大和朝廷に最後まで抵抗した異民族)を意味するから、これも蔑称である。

こんな蔑称を親の馬子が付けたら、本人が名乗るはずもない。因みに稲目や馬子の名前は現代ならばあまり使いたくない文字だが、古代では動物や植物の字を当てる事も多いので、当時は必ずしも蔑称ではない。

「蘇我蝦夷」と言う嫌悪すべき名前を付けた人物は誰かとなるが、記紀に記録させた編纂時の最高権力者の持統天皇と藤原不比等しかあり得ない。

乙巳の変で蘇我蝦夷を抹殺した権力者にとっては、蘇我蝦夷が最大の仇敵だったであつた証拠である。その結果、彼の先祖から親類

に至るまで不名誉な「蘇我」となってしまうた。

この仇敵とされた蘇我蝦夷は、父の馬子亡き後に天智天皇の父親の舒明天皇とその後継に天智の母の皇極天皇を擁立したキングメーカーと記録され、天智やその娘の持統にとつては恩人の筈なのだが、なぜ蘇我氏の中でここまで徹底的に嫌悪されたのだろうか。

記録は、蝦夷は皇極女帝即位後に息子の入鹿ともども天皇を蔑ろにする言動が多かったので、皇太子の中大兄皇子と中臣鎌足が蝦夷の甥の蘇我倉山田石川麻呂を抱き込んで、西暦六四五年の乙巳の変で蝦夷・入鹿を討伐したとなっている。

#### (乙巳の変以後の政局)

事変の後は、皇極の実弟の孝徳が即位し中大兄を皇太子として、阿倍倉梯麻呂を左大臣に蘇我倉山田石川麻呂を右大臣として、都を飛鳥から難波に移し、それまでの親百濟一辺倒の外交政策を改めて親新羅・親唐政策に舵を大きく変更する。

孝徳五年に阿倍左大臣が病死すると、中大兄は間髪を入れずに倉山田右大臣を謀反の嫌疑で一族もろとも自決に追い込み、こうして

孝徳の両翼をそぎ落として、孝徳の立ち枯れを狙う。この倉山田石川麻呂の謀反嫌疑を無実と知った中大兄は大いに悲しんだとある。

#### (欽明天皇と蘇我氏の関係)

蘇我氏の歴史上の登場は、継体天皇の後継者の宣化天皇の大臣として登場する稲目である。こつ然と登場する理由は謎である。

宣化は数年で崩御し、継体の嫡子の欽明天皇(前王朝の雄略の血統につながる手白香皇后との子)が即位して、大伴氏の失脚を受けて稲目は欽明の大番頭として活躍、欽明やその後の敏達天皇に自分の娘を妃として差し入れて、その皇子たちを順次即位させて外戚として盤石の地位を確保する。

私見は、蘇我氏は応神王朝(河内王朝)を樹立した名族葛城氏の一支族とにらんでいる。稲目は、越前王朝の継体・安閑・宣化の皇統を打ち破って、葛城氏の本流の欽明を天皇位に付け、欽明とともに忽然の登場となる。

葛城氏の本流の配下であった蘇我氏は、淀川が大阪湾に注ぎ込む入り江にある河内湖以南の石川郡を含む河内平野の大半を領地とし、雄略天皇による葛城氏族長の殺戮による衰退

を受けて、枝流の蘇我氏が徐々に飲み込んで行き、半島からの帰化人たちも配下に継承し、キングメーカーの財力と武力を持つに至った。

#### (蘇我氏の本領地と出自)

稲目の時代には、河内平野の大半と播磨や吉備の一部にも勢力を拡大する程度であったが、馬子の時代になると、物部氏との勢力争いに勝利して、河内全域から摂津や山城の一部にも領地を拡大、淀川流域から山城にかけて地盤を拡大していた秦氏と聖徳太子の交流の逸話は、聖徳太子の後ろ盾である蘇我氏の統治がこの方面にも及んでいた証拠である。

領地からの年貢よりもっと大きなものが、朝鮮半島と中国の隋との交易による莫大な利益が蘇我氏の富の最も大きな源泉であった。

先進国との交易は、室町幕府の三代将軍の足利義満の明との勘合貿易、織田信長の境商人との取引、また江戸幕府の長崎での貿易、幕末の薩長の英国との貿易などなど、先進外国との貿易は年貢以上に莫大な利益を齎した。

蘇我稲目と馬子の躍進の富の源泉は百濟・高句麗。伽耶との交易に加えて中国の隋との交易だったのである。

蘇我氏が渡来人かどうかについては、領地内には沢山の渡来人がいた訳で、男女関係は数多く重ねられていたであろう。従って積み重ねを経た蘇我氏は有能な渡来人と変わらぬ文化と技術を持っていた筈である。

馬子の富は他の豪族を圧倒していた筈なので、傭兵の東漢人をはじめ西文人や鞍作氏等の最先端の知識人たちを抱える事ができた。

(蘇我氏の河内・斑鳩派と飛鳥派の対立)

馬子が、物部守屋を討ち滅ぼして勢力を河内全般に更には播磨・吉備に勢力を拡大し、また半島との交易や隋との交流の本格化を背景に、政治の舞台は飛鳥から難波に移る。

聖徳太子の斑鳩への転居もこういう背景があったのであろう。飛鳥は推古女帝の宗教上の儀式中心の都に落日する。

この結果、河内と斑鳩には御大の馬子、弟の境部摩理勢、馬子の息子の倉麻呂、聖徳太子が居並び、一方飛鳥には推古女帝と蝦夷が居座る事となるが、両派を束ねる扇の要の馬子と聖徳太子が死去すると、境部摩理勢対蝦夷の権力争いが起きて、推古崩御後の後継者問題で聖徳太子の息子の山背大兄皇子と田村皇子の擁立を巡って武力衝突となる。

その結果は、蝦夷が勝利して境部摩理勢は討ち死にし田村が即位して舒明天皇となる。

この時の倉麻呂は、兄の蝦夷の助勢依頼に對して中立を表明、蝦夷との間に隙間風が吹くようになる。この倉麻呂の中立的態度は、舒明や妻の皇極の耳にも入り、これを伝え聞いた幼い中大兄も倉麻呂を面憎き奴と心にくんだであろう。この舒明が中大兄の父であり、その皇后が一兒を抱えて舒明と再婚した皇極である。

(蘇我倉氏の本拠地)

倉麻呂は、兄の蝦夷が飛鳥を本拠地としたのに対して、河内の難波と故地の石川を本拠地とする。従って、倉麻呂の子供たちの倉山田石川麻呂。日向・赤兄・連子・果安も河内を本拠地としたはずである。

倉や山田や石川の地名は河内の石川を意味している事は間違いない。要するに、馬子の遺産の相続は蝦夷が大和を、倉麻呂は河内をとった。

倉麻呂と跡継ぎの倉山田の本拠地を河内と推定した根拠は、乙巳の変の後に都を飛鳥から難波に遷都するが、孝徳の後ろ盾の倉山田石川麻呂の本拠地が難波だったからである。

何時の時代も、傀儡の王は後ろ盾の本拠地を住みかとするし、後ろ盾は掌中の珠を外敵の少ない己の本拠地にかくまう。尤も飛鳥は中大兄の根拠地であり、蝦夷一派の殘党の反クーデターの危険もあるので、安全な難波に避難し、結局孝徳は終生難波を都とする。

(蘇我倉山田石川麻呂)

この倉山田石川麻呂の登場は、専横を極める蝦夷と入鹿親子を討伐するために、中大兄皇子と中臣鎌足から助力を頼まれたとなっている。入鹿殺害場面の「三韓の調の天皇への奏上の読み上げ」役を倉山田に与え、約束の斬り込み時刻が過ぎて何も起きないので倉山田は恐怖で体を震わせ、これを見て入鹿は異変を予感する気配なので、失敗に終わるかと心配した中大兄が斬り込んで成功する。要するに、この倉麻呂を度胸の無い意気地なしに仕立て、中大兄を英雄に仕立てている。倉山田の軍事力を当てにしていた事を隠そうとしてこんな脚色をしたのだろう。これは書紀の欺瞞で実際は、蝦夷と入鹿を抹殺するには宗家の親衛隊の倭漢人らを打ち破るだけの軍事力が必要であり、それが目的の倉山田石川麻呂の抱き込みであった。入鹿一人を殿中

で殺しても蝦夷の天下は覆らないし、中大兄の殿中での活躍など匹夫の勇に過ぎない、最大の功労者は軍事力を背景とした倉山田と阿倍氏であった。

要するに、蘇我倉氏の軍事力は宗家に匹敵するほど大きかったと推測できる。

ところが、乙巳の変の五年後には、中大兄の暗殺の嫌疑で倉山田は滅亡させられる。

それも、彼の発願の山田寺の講堂前で一族が自決したとなっている。身内の日向の讒訴によるもので、中大兄は殺害後彼の潔白を知って嘆き悲しんだとなっている。まるで歌舞伎を見ているような「空々しい」脚本である。難波から討手に追われ、飛鳥の山田寺まで数日間で逃げてきて自決したとあるが、女子供連れで難波から飛鳥まで数日間で移動することなど絶対にできない。

確かに飛鳥に山田寺が建立されたが、倉山田が目指した山田寺は飛鳥ではなく、河内か故地の石川に建築中の山田寺だったのである。この河内の山田寺は発願者の横死により、永遠に中止された筈。即ち飛鳥の山田寺は、倉山田のだまし討ちを悔いた娘婿の中大兄と、彼の娘で倉山田の孫にあたる持統による罪滅ぼしの弔いの建立だったのではないか。天武

も倉山田の孫娘を妃としているので、山田寺建立に異論はなかったであろう。

結局、倉山田石川麻呂の孫が持統天皇であり、更なる子孫に文武・聖武天皇を輩出し、奈良時代の皇統に継承された。

奈良時代は、倉山田の弟の連子の娘の娼子が藤原不比等の正室となり、藤原四家のうちの三家を興して権力を独占し、その後の平安時代以降は娼子の次男の北家が摂関家として千年以上も栄華を誇る事となる。

最後の結びとして、屈辱的な姓氏の「蘇我」は、連子の孫の「石川石足」が勅許を得て、「石川氏」に改姓をし、以後石川氏を名乗る事となる。因みにこの石川石根は従三位の顕官まで上り詰めるが、親族となっていた藤原四家の引立てのお蔭によるのだろう。了

## 幹事の退任の申し出

現幹事の隆恵氏と漆原直子氏から、つぎのようなお申し出がありましたので、そのまま、お伝えいたします。

今般一身上の都合で来年一月の総会にて退任いたします。真に勝手に申し訳ありません。つきましては、来年度以降の会の運営方針等につきましては、一月総会で決定願うこととなります。宜しくご検討下さい。

自由原稿

幕末・維新期の主要人物と

初代陸軍医務局長 松本順

諸橋 奏

『新編日本史』(文部省検定済 昭和六十三年度用 高等学校用 原書房 松村剛他著)の「幕末・維新期の主要人物一覧表」は次の如くである。

「勝安芳(一八二三〜九九) 45(数字は大政奉還時の年齢)・岩倉具視(一八二五〜八三) 43・西郷隆盛(一八二七〜七七) 41・大久保利通(一八三〇〜七八) 38・吉田松陰(一八三〇〜五九) 38・孝明天皇(一八三一〜六六) 37・木戸孝允(一八三三〜七七) 35・井上馨(一八三五〜一九一五) 33・坂本龍馬(一八三五〜六七) 33・松平容保(一八三五〜九三) 33・三条実美(一八三七〜九一) 31・徳川慶喜(一八三七〜一九一三) 31・後藤象二郎(一八三八〜九七) 30・高杉晋作(一八三九〜六七) 29・伊藤博文(一八四一〜一九〇九) 27・明治天皇(一八五二〜一九一二) 16」の十六人をあげている。

欄外「吉田松陰と松下村塾」(抜粋)には「明治維新を推進した英傑を輩出した松下村塾は、

高杉晋作・久坂玄瑞・伊藤博文・山県有朋・品川弥二郎ら多数の志士が育った私塾で(中略)松陰は外圧のせまるわが国の国防策を模索した。そして、わが国の「皇国たるゆえん」を知り、西洋の技術を学ぶことの必要性を感じ、その「至誠」を信条としたきびしい教育は、塾生の人格形成に決定的な影響をあたえた」とある。

また、『歴史探偵団がゆく 日本史が楽しい』(半藤一利編著 文藝春秋)の「明治維新の志士ベスト10」(幕府側の人びとははずす)南條範夫・村松剛選は「吉田松陰・高杉晋作・西郷隆盛・大久保利通・木戸孝允・坂本龍馬・岩倉具視・伊藤博文・板垣退助・山県有朋」。(追記)尚、本文中に「役割を終わると次々に死んでいく(人)」として、吉田松陰・久坂玄瑞・高杉晋作・坂本龍馬。「維新の三傑」として、西郷隆盛・大久保利通・木戸孝允。「西南戦争後の明治政府を作り上げた人たち」として、伊藤博文・山県有朋・黒田清隆をリストアップしている。この「明治維新政府成立に本質的な役割を果たした人たち」の基準の中には幕府側の人たちは含まれないことになる。

慶長八年(一六〇三)徳川家康が江戸幕府をひらいて以来慶応三年(一八六七)の大政奉還

まで、十五代二百六十五年つづいた徳川幕府にも有能な人材が多数いたことは周知の如くであるが、あの兄弟や仲間同士が敵味方に別れての激動の幕末・維新期に徳川幕府と明治新政府の両政府で要職についた人物となると稀有である。福沢諭吉の「瘦我慢の説」でいう新政府に仕え爵位を得たことで非難された勝海舟と榎本武揚、それにもう一人松本順がその代表的な人物といえる。

勝海舟は、幕府軍艦奉行・海軍奉行並・陸軍総裁、更には江戸城明け渡し時の幕府代表を。明治政府では参議兼海軍卿・枢密顧問官(外務大丞・兵部大丞・元老院議員・貴族院の伯爵議員は辞退)を務めた。伯爵。

また榎本武揚は、幕府軍艦頭・海軍副総裁を。明治政府では伊藤内閣で通信大臣、黒田内閣では農商務大臣を兼任、更には文部大臣に、次の山県内閣にも留任。松方内閣では外務大臣と、長薩藩閥政府の中で唯一の幕臣として重用され、枢密顧問官となり、葬儀は海軍葬であった。子爵。

また、勝は西郷隆盛と共に「江戸城を無血開城、江戸を戦火から救った幕臣」として、榎本は箱館五稜郭に拠って「最後まで戦い抜いた徳川遺臣」で、その国際知識・政治手腕

を惜しんだ官軍参謀黒田清隆が剃髪して命乞いをした人物としても知られている。

勝、榎本に比して知名度は低いですが、政治家以外で、幕末・維新时期両政府で要職を務めたのは、松本順(良順)である。松本は徳川幕府で、奥御医師・西洋医学所頭取・歩兵奉行並・海陸軍軍医総長。明治政府では山県有朋の依頼で兵部省軍医頭・初代陸軍軍医総監。男爵。

司馬遼太郎『胡蝶の夢』(新潮社)、篠田達明『空の石碑』(NHK出版)、子母沢寛『新選組始末記』(角川書店)、黒川鍾信『東京牛乳物語』(新潮社)、茅原健『工手学校』(中央公論社)、石黒敬七『写された幕末』(明石書店)などに登場。『写された幕末』には「安政五年(上野)彦馬撮影成功の肖像写真、幕府医官松本良順。彼も写真の研究者」の説明つきで、良順の帯刀姿写真が載っている。

松本は幕末・維新时期を彩る偉材で、政治分野における勝・榎本の医学分野版ということが出来よう。

改めて、松本順(良順)の年表・経歴を記すと次の如くである。

天保三年(一八三二)江戸麻布我善坊に生まれる。父佐藤泰然は本邦初の私立病院(佐倉順天堂創始の蘭学者でその次男、幼名順之助)。

嘉永二年(一八四九)十七歳 父の盟友、幕府奥御医師松本良甫の養子となる。

安政四年(一八五七)二十五歳 幕命により長崎海軍伝習所へ。来日オランダ軍医ポンペに系統的な西洋医学を教わる(長崎大医学部のおこり)。

文久元年(一八六一)二十九歳 本邦初の洋式公立病院長崎養生所を設立、副院長。江戸に戻り、西洋医学所(種痘所)東大医学部と変遷)副頭取。

文久三年(一八六三)三十一歳 西洋医学所第三代頭取。本格的医学教育開始。

元治元年(一八六四)三十二歳 奥御医師兼医学所頭取・歩兵奉行並・海陸軍医総長。

慶応二年(一八六六)三十四歳 將軍家茂臨終に立会う。次いで將軍慶喜の侍医。

慶応三年(一八六七)三十五歳 検微病院設立。明治元年(一八六八)三十六歳 戊辰の役では幕府軍と行動を共にす。仙台から横浜に戻り、潜伏中官軍に捕らえられ、幽閉。

明治四年(一八七一)三十九歳 時の兵部少輔山県有朋の依頼で兵部省軍医頭。良順から順に改名。

明治六年(一八七三)四十一歳 初代陸軍軍医総監(十五年、第三代軍医総監再任)。軍医制度の確立、本邦初の医師試験実施。

明治十年(一八七七)四十五歳 西南の役で軍衛生全部門を統轄。

明治四十年(一九〇七)死去、享年七十五。貴族院議員、男爵、勲一等、従三位。

以上、年表・経歴にみる如く徳川幕府と明治政府の両政府で要職をつとめ「日本の医学の歴史を変えた」人物であることがわかる。

更に業績を付記すると、長崎海軍伝習所時代に、本邦の写真術創始に重要な役割を果たしたこと。また明治十八年(一八八五)陸軍軍医総監を退官後、予防医学として衛生思想を説き、飲用牛乳の普及に尽力(明治三年伯父坂川當晴に東京初の「石薬・牛乳」の「搾取業」を開業させている。更に手軽な健康法としての海水浴啓蒙のため、大磯をはじめ各地に海水浴場を開設した。

松本順を語るとき、特筆すべきは彼が多彩な血縁関係と交友関係を列挙するとまずその血縁関係を列挙すると

父・佐藤泰然(初代順天堂堂主)をはじめとして、田中芳男(男爵)・山内作左衛門(資生堂創設)・林洞海(蘭方医、幕府奥医師、大阪医学校長)・緒方洪庵(蘭医、適塾設立、種痘施行、法眼、奥医師兼西洋医学所頭取)・佐藤尚中(第二代順天堂堂主)・林董(伯爵、初代英国大使)・林紀(第二代陸軍軍医総監)・榎本武揚(子爵、海軍中将、通信大臣、農商務大臣、文部大臣、枢密顧問官、外務大臣)・赤松則良(男爵、海軍中将)・西周(思想家)・西紳六郎(海軍中将、思想家)・緒方維準(陸軍軍医監、陸軍軍医学校長)・箕作麟洋(男爵、行政裁判所長官)・佐藤進(男爵、陸軍軍医総監)・福沢諭吉(思想家、教育家、慶応義塾創設、明六社組織、「時事新報」創刊)・福沢捨次郎(時事新報社長)・林雅之助(男爵)・赤松範一(男爵)・森鷗外(文豪、第八代陸軍軍医総監)・長岡半太郎(初代大阪大学学長、物理学文化勲章受章)と枚挙に遑なしである。

血縁関係に続き、その交友関係を記すと、安政二年(一八五五)、幕府は長崎に海軍伝習所を開設。松本良順は幕命により安政四年軍医として入所、勝海舟や榎本武揚らを知る。同時にオランダ軍医ポンペ(安政四年海軍伝習所医官として来日。長崎養生所などで西洋医学の教授は勿論、物理・化学・解剖・外科

手術・内科・眼科・産科・病理・調剤学・法医学・臨床まで教え、日本に五年間滞在)を師とし、その協力者をつとめた。松本の弟子となり通訳として力になった語学の天才司馬凌海(洋方医、本名島倉亥之助、東京の医学校教授、ドイツ語塾経営、オランダ語・英語・ドイツ語・フランス語・ロシア語・ラテン語・中国語を解した)を知ったのはこの時である。また、この長崎滞在中に師ポンペの写真道楽にも協力、上野彦馬・前田玄造・古川俊平・内田九一らと日本写真術の夜明けにも関わった。

更にポンペの教え「医師は患者には常に侍・町人、貧・富の差にかかわらず平等でなければならぬ」に従い、その交友関係は將軍・貴人から新選組、歌舞伎役者、非人の親分までの広きにわたっている。

中でも新選組との関係は深かった。

元治元年(一八六四)下谷和泉橋の西洋医学所に松本を突然、近藤勇が訪ねてきた。斬り込みか?と思つたが結局は急性胃炎だったという。そして、良順の「西洋を知らねば武も国も亡びる」という大義に感動した近藤の「義兄弟に」との申し出を快諾して義兄となった。翌慶応元年、將軍家茂が京に上るのに伴い京住いになるや松本は西本願寺の新選組屯所にまで足を運び、近藤以下隊士の健康診療は勿

論、その台所の衛生、食の栄養指導までこまかに面倒を見、これに依って隊士も教えには従順であつたという。

戊辰戦争で敗走北上する幕府軍と行動を共にし、会津攻防戦に負傷者治療医師団として活躍した松本は、仙台で土方歳三に会う。ここで土方は松本に「君は前途有用な人なり。宜しく断然ここより去つて江戸に帰らるべし」と助言。良順はこの土方の言葉に従うのであるが、土方を生命の恩人と思つたのではないだろうか。旧板橋宿入口の「新選組局長近藤勇昌宜・土方歳三義豊之墓と隊士供養塔」(明治九年、隊士永倉新八発起人、松本順協力造立)や高幡山金剛寺の勇、歳三「殉節両雄之碑」に松本の思いが感じられる。

また幕府軍戦況不利のなかでの会津行に良順は四人の門弟、名倉知文・渡邊洪基・小泉順英・三浦渙を連れていくが、門弟たちは「地獄へまでも」と良順に心酔していたという。

この門弟の一人渡邊洪基の略歴を記すと、嘉永元年(一八四八)越前府中に福井藩士で医師渡邊静庵の長男として生まれ、戊辰戦争では松本良順とともに幕府側で参戦するが、その後許され新政府に出仕、岩倉使節団随員、元老院副議長、帝国大学(現東京大学)初代総長、



工手学校(工学院大学前身)設立など。明治三十四年(一九〇一)死去。

扱、日本民族の。パラダイム(一時代の支配的な物の見方……)例えば「コメ本位制」の転換(シフト)ともいえる江戸時代(近世)から明治時代(近代)への激動期、両政府に出仕し、その懸け橋の重責を担って活躍した三英傑、勝海舟・榎本武揚・松本順には幾つもの共通点がある。

まず三人とも江戸生れ。海舟は文政六年(一八二二)江戸本所亀沢町、順は天保三年(一八三二)江戸麻布我善坊、武揚は天保七年(一八三六)江戸下谷御徒町である。江戸生まれは地方に捕らわれることなく、日本国を総合的に視る大局観を体得出来た。

次いで幕府が海防の必要を痛感して設立した長崎海軍伝習所(旗本・御家人から選抜し、オランダ人が教授)で奇しくも同学の士となったこと。海舟は安政二年(一八五五)伝習を命じられ(三十三歳)、翌三年、武揚入所(二十一歳)、翌四年良順入所(二十五歳)。ここで三人は全く同じ西洋の近代知識と思想を身につけたのであった。

しかし、当伝習所で習得した最大の成果は、西洋の知識、教養の修得と選抜入所の俊才達との西洋事情の研鑽とが相俟って「大義とは

何か」を自覚したことである。彼らの大義とは「まず第一に西洋列強の戦力の脅威と老獪さから日本国を守ること、次いで民に平等をもたらすこと」との確信を得るに至ったことであつたといえよう。

しかもその数年後、三人はともどもに、心ならずも賊軍(敗者)、弱者の立場を味わうこととなり、ここでも境遇を共有する。その生死にもかかわる逆境下、海舟は「江戸城無血開城会談」で官軍参謀西郷隆盛に助けられ、武揚は「箱館五稜郭の戦い」で官軍参謀黒田清隆に救われる。また順は、明治四年三月、早稲田に蘭疇舎病院を設立開院の半年後、明治新政府兵部少輔山県有朋の依頼で出仕することとなる。

生死の窮地で「敵中にも知己」を得る三人の知徳と人間性に敬服するばかりである。ところで、この三英傑晩年の言動に、両政府懸け橋出仕の「志」の片鱗を伺い知ることが出来る。

海舟は明治を三十年も過ぎた頃「ひよつとするとこの明治よりも徳川時代の方が民衆は幸福だったかも」と文明主義に疑問を投げかけ、例として「足尾鉍毒事件」を指摘している(『氷川清話』江藤淳・松浦玲編)。

偶、武揚は明治二十七年当鉍毒事件が社会問題化した多難な農商務大臣に就任。三十年三月三日、歴代大臣で初めて被害民代表と面会、直ちに現地視察、鉍毒調査委員会設置、電光石火議会で関連法案を成立させ、三月二十九日引責辞任をしている。

松本順については「日本の医学の歴史を変えた医学者」との認識をもったが……。

更に、順の師ポンペの至言「医師は患者には常に平等でなければならぬ」との医学の原点の具現化努力はやがて日本人に染み付いていた江戸身分制度を崩壊させる底力になったといわれている。司馬遼太郎の『歴史を変えた医学』(週刊朝日・村井重俊・太田サトル)には松本順の目に見えない功績に対しての「称賛」が著されている。

三英傑の重要な共通点がもうひとつある。三人共健康で長寿だったこと。

享年、勝海舟七十七歳(明治三十二年)、榎本武揚七十三歳(明治四十一年)、松本順七十五歳(明治四十年)。

三者、波瀾万丈の生涯を立派に生き抜いての長寿は、まさに美德というべきであろう。

自由原稿

## 出雲大社再考 (七)

忘れ去られた野城大神 (上)

村上 邦治

『出雲国風土記』によると、古代出雲国は、東に野城(野城神社現能義神社)、南に熊野(熊野大社)、北に佐太(佐太神社)、西に杵築(天の下造らしし大神大穴持命、杵築大社現出雲大社)の各大神に、四方を護られていた。

大神の中でも、熊野と杵築の大神は、大社と記され、野城と佐太の二大神より、上位であった。熊野と杵築では、常に熊野大神が上位とされた。このように、八世紀初めの出雲国内では、奈良朝廷による記紀神話とは、明らかに相違しており、天照大神、ニニギノ尊に繋がる、天皇を中心とした記紀神話が、中央で創作されたことを、如実に物語っている。

出雲国を護る四大神について、筆頭の熊野大神は、伊弉諾尊のいとしい子(天神)として記載され、同時代の資料『出雲国造神賀詞奏上』と、同じ由来を述べている。杵築大神(大穴持命・大国主命)は、出雲国の随所で活躍し、多くの郷や里に登場している。国神

(地方神)でありながら、創作後二〇年を経た記紀神話の影響を受け、「天の下造らしし」と修飾されて述べられている。佐太大神は、加賀の潜戸での金弓矢射通誕生伝承など、多くの逸話がある。

ところが、野城大神については、意宇の郡、野城の駅家(うまや)の謂われについて「野城大神の坐すに依りて、故、野城と云ふ。」と記されているのみで、野城大神についての、伝承や説話の記述は一切ない。

古代よりこの地は、山陰道にて伯耆国から出雲国に入る最初の駅家で、軍事・商業・流通などの重要地であった。次の駅家は、国庁・国衙や国分寺など出雲国府や意宇郡家が集まる黒田駅家である。この野城の地を、野城大神が護っていた伝承は、在地では古くからあり、大神の名が、地名として使われていたことが分かる。

『風土記』の意宇郡「寺・社」の条に、神祇官記載社として、野城大神を祭神とする野城の社が、記載されている。しかし、八世紀初めの頃には、野城大神について、詳しい伝承は、既に失われており、『風土記』には、他

の大神のような伝承は、記載できなかったものと思われる。

それでも、『日本三代実録』によると、貞観九年(八六七)従五位下から従五位上へ、貞観一三年には、正五位下へ、各々昇級されている。しかしここでも、四大神としては大きく遅れていた。貞観九年四月に熊野神、杵築神は、正二位へ、佐太神は正五位へ同時に昇級した。しかし能義神だけは、一月遅れの五月に、同じ意宇郡の伊布夜神(現揖屋神社)と同時に従五位上に昇級している。もはや過つての四大神からは、脱落していた。そして、貞観一三年には、同郡の佐久佐神(現八重垣神社)、伊布夜神とともに、正五位下に昇級したが、在地の神社並みになってしまった。しかし『三大実録』の記載では、能義神は神社の名であり、大神名である野城とは異なっている。野城大神ではなく、能義神社に対して階位を授けたものとみなされる。なぜなら、その後に出された『延喜式』には、野城大神を祀る神社としては、野城社の記載があり、能義神社とは別々に記載されている。つまり、能義神が、能義神社と解釈すれば、実録の昇級は、無理なく理解され、すでに野城

大神は、能義神社の祭神ではなかったのである。

現在の能義神社の祭神は、野城大神とは異なり、出雲国造の祖「天穂日命」（天照大神二男）である。祭神が変わったのは、いつの時代であろうか。この疑問に、有力な示唆を与えてくれるのが、延長五年（九二七）撰進された『延喜式』である。

これには、『風土記』意宇郡に記載の野城社は、そのまま記載されており、転載したものであると思われる。

一方、『風土記』に記載のない「天穂日命神社」が、意宇郡から分割された能義郡の項にただ一社代表して記載されている。しかし、同郡には、同名の神社は存在しないのである。この時期、分離新設された能義郡の中で、この地を代表する最大の神社は、能義神社である。つまり、新たに天穂日命を祀る神社とは、忘れ去られた野城大神にかわり、祭神のいなかった能義神社であろう。一〇世紀頃より、能義神社が、新たに天穂日命を祭神としたことが、『延喜式』の記載から推測されるのである。

平成二六年一〇月、出雲は、出雲大社宮司千家家長男と、皇族高田宮女王との結婚で、沸き立っていた。この結婚式から一〇日後、安来から足立美術館を通り過ごし、能義神社を目指したが、手持ちの地図には能義神社の記載がなく、やむなく、月山富田城に変更した。そのドライブ途中、車から大きく秋の例大祭の幟に、能義神社の名前がはつきり見えた。慌てて、幟を目指して、稲穂が実る田圃の細道を走り、やっと能義神社にたどり着いた。例大祭前日という幸運により、所在が分かったのである。

三〇メートルほどの小高い丘に、五〇段の石段を上ると、小ぶりな大社造りの本殿をもつ、能義神社があった。氏子が忙しく秋祭の準備をしていた。宮司は、常駐しておらず、氏子数十人で、社殿の清掃やしめ縄の取り付けを行っていた。

見学していた私に、総代の方が、過っては、現在よりも上の高台に位置していたこと、江戸初期火事にあい、月山富田城主堀尾氏により、現在の本殿が再建されたことを、説明してくれた。

そして、何よりも強調したのは、祭神が天穂日命であり、例大祭のときには、千家家か

ら、必ず参列されるということであった。皇族との結婚で、衆目が集まる「その千家家がおいでになるのです」と、誇らしげに私に話された。

そこには、古代出雲国の四大神、野城大神の話は、何一つでてこなかった。

（つづく）

九月から会場が銀座ルノアール貸会議室に変わりました。  
東京駅八重洲北口・外堀通り横断徒歩三分、S M B C日興證券並びです。  
また、十一月の例会は、第四土曜日の二十八日の午後四時半からとなっています。ご注意ください。

自由原稿

## 『入の沢遺跡』

漆原直子

この九月の彼岸の「銀週間」に、宮城県へ父と叔父と祖母の墓参に行く用事があったので、そのついでに、ちようど栗原市で開催された「入の沢遺跡」のシンポジウムに参加した。折しも、仙台は復興支援のためということで、「嵐」のコンサートが四日間も開催されることになっていて、周辺のホテル及び新幹線の駅にあるホテルは、春先から軒並み満杯で大変な状況になっている最中であつた。私はその「嵐」を何とか避けつつ、無事目的を達成することができた。

『入の沢遺跡』は、伊治城跡の南にある古墳時代前期から奈良・平安時代の竪穴住居等や、鎌倉から江戸時代にかけての塚等、年代層の広い複合遺跡である。これは平成二十六年に、一般国道四号線築館バイパス建設工事に伴って発掘調査を行い、発見された。特に古墳時代の遺構が多く、四世紀の竪穴住居跡四十九軒、堀跡、大溝跡、塚等が発掘された。この遺跡が今、大変な注目を浴びており、そ

の学術的な価値から、遺跡の保存運動が起きている。なぜ注目を浴びているのか、それは次のような理由による。

・見晴らしの良い丘陵頂部に築かれており、大溝と兵で囲まれた「高地性防禦性集落」の様相を呈している。

・竪穴住居は十二軒調査し、そのうちの五件は火事に遭った焼失住居であつた。

・竪穴住居跡から、銅鏡四面〔仿製鏡(国内産の鏡)の珠文鏡二面、内行花文鏡一面、櫛歯文鏡一面〕、ガラス小玉、管玉等の装身具、鉄斧・剣・刀子・簀等の鉄器三十点、赤色顔料(水銀朱・ベンガラ)等が出土。銅鏡の裏面にはベンガラが付着していた。このベンガラが付着した銅鏡は、日本海側の特徴を示すという。

銅鏡については、遺構から出土した例は、国内では最北の例になり、これだけの鉄製品、装身具が出土するのも、古墳時代前期においては最北の例になるといふ。そして、銅鏡、鉄製品、装身具、水銀朱は、通常古墳に副葬されるものであり、集落からまとまって出土するのは非常に珍しいことだとされる。

・関東系と見られる土師器のみが出土。周辺集落跡からは統縄文土器(北大式)が出土

しているが、入の沢遺跡からは、一つも出土していない。

四世紀という古墳時代前期に、東北の地にこのような遺跡があるということは、どのような状況が想定されるのか・・・?このシンポジウムの正式名称は、

東北学院大学アジア流域文化研究所  
公開シンポジウム

『古代倭国北縁の軋轢と交流』  
栗原市入の沢遺跡で何が起きたか

である。案内のチラシには、次のような説明文が載っていた。

「大和王権が日本列島で最初の広域支配体制を広げる4世紀の頃。大和と同じ暮らし方をする人々が北のはずれに濠と材木堀で防御を固めた大きなムラを作った。しかし、ムラは火事に遭い放棄された。大切な鏡や装身具鉄製品までもが遺跡に残された。栗原市入の沢遺跡でいったい何が起きたのだろうか。」

ここで、考えられる事は、大和王権側の人々がこの「入の沢」の地に進出してきて、在地の続縄文文化を担う人々(いわゆる蝦夷とされた人々)との間で何らかの軋轢が起きたという事である。想定しうる最悪のシナリオは、西から移住又は東征のためにやってきた古墳文化人の集落が、在地の続縄文文化人に焼き討ちをされて、大事な鏡もそのままにして逃げ去ったか、囚われの身になったかである。しかし、今の所、殺傷人骨や、多量の武器・武具等が出土したという報告は無い。人間同士の争い、外部からの侵入によるものなのか、内部における抗争によるものなのか、又は、落雷等の自然災害によるものか、まだ原因ははっきりしない段階である。しかし、このシンポジウムの主催者側は、在地民と移住者との間の「軋轢」、「争い」を想定している。

一体、この地で何が起きたのか・・・？

入の沢遺跡の北側に伊治城跡がある。地元の方々には伊治を「いじ」と呼んでいたが、多賀城から出土した漆紙文書に「此治城」という表記が発見されたことから、「コレハリ」が本来の読み方であるとされる。また栗原市の

栗原「クリハラ」は、「コレハリ」が転訛したと言われる。

伊治城は、七六七年(神護景雲元年)に造営され、七八〇年(宝龜二年)栗原郡大領伊治公皆麻呂が伊治城にて按察使紀広純牡鹿郡大領道嶋大楯を殺害して火を放ち、多賀城も襲って焼き討ちした。かの有名な(?)「伊治公皆麻呂の乱」である。その後も伊治城は九世紀前半頃まで存続したが、城柵としての機能は失われてゆき、郡衙的な機能となり、十三世紀初頭の遺構や遺物が出土している。なお、この伊治城の造営以前には、古墳時代前期から中期の遺構が見つかっており、円墳や方墳と竪穴住居が出土している。また、続縄文土器と関東系の土師器が混在していた。文献資料が無い、又は乏しい地域や時代を考える際、土器の分布は重要な手がかりとなる。年代という垂直軸と人々の移動・交流という水平軸を見ることで、当時の人々の社会状況を推察するのである。つまり、ここは古墳文化圏と続縄文文化圏の接点、緩衝帯にあたり、蝦夷社会との境界とも言えるのである。

である。今後の更なる調査と研究が待たれるのと、是非遺跡は保存して頂きたい。今回、道路の建設というきっかけがあったために、発掘調査が行うことができたわけだが、日本の文化財行政が開発ありきであるため、消失する可能性が高い。そのため、多くの研究者や学者が市・県・国に、遺跡保存のための要望書を提出したのである。それが功を奏して、道路建設の見直しが図られているようである。文化財行政のあり方も見直して頂きたいものである。

伊治城と入の沢遺跡との関連性も考えていく必要があるという。

最後に一つこのシンポジウムのテーマに疑問が残ったので述べたい。それは、ここを「古代倭国北縁」としたことである。「古代北縁」は良いが、果たして四世紀の段階で「倭国」であったのかどうかである。『日本書紀』には、かつて「日高見国(ヒタカミノクニ)」があったと書かれており、倭国の他に「日高見国」があったはずである。北上川があるが、この北上「キタカミ」は「ヒタカミ」が転訛したものとも言われる。シンポジウムの中では、「倭国」の定義についての説明は無かった。この二つの国の関係についても触れて欲しかった。

慕史堂主人 中込勝則氏の著作集

七月の史遊会で中込勝則さんから豪華なカラー写真入りの私家出版本『シルクロード印

「日暮硯」—恩田木工による信州真田藩々政改革のこと—	2003.09
—指導者たる者いかに生くべきか—	
(I・II)「廟堂忠告」・「風憲忠告」	2007.07
(III)「牧民忠告」	2006.09
—シルクロード印象記—	
(I)「砂とポプラとハミ瓜と」	2002.07
(II)「シルクロードを超えて 青のサマルカンドへ」	2004.05
(III)「王朝街道を行く」	2006.12
(IV)「トルコ・イスタンブール歴史紀行」	2008.02
(V)「興亡の流砂の大地に 紅く花咲けタマリスク」	2013.07
(VI)「遙かなる河西回廊歴史紀行」敦煌から西安まで	2015.07
杜甫生誕1300年記念「杜甫を味わってみませんか」	
第一編 生誕～長安における苦節十年	2012.05
第二編 長安における交遊～安祿山の乱勃発	2012.07
第三編 乱中、杜甫長安に軟禁～長安を離れる	2012.09
第四編 長安を離れ秦州へ～更に成都へ	2012.11
第五編 成都時代	2013.01
第六編 蜀を去って長江を下り夔州へ	2013.03
第七編 夔州時代Ⅱ、更に長江を下る	2013.05
第八編 夔州から更に長江を下って南航し没するまで	2013.09
「私の好きな漢詩」(上・下)	2002.08
「私の好きな漢詩」(続1・続2)	2002.11
「この美しき日本の詩」	2003.04
漢詩にみる「四川省点描」—唐詩選より李白・杜甫—	2004.09
「中国江南の歴史と今を散歩する」	2009.07
「大連・旅順 旅行」—写真と短歌—	2010.04
「大連・旅順ツアー 写真・短歌・文」	2011.04
「韓国 八つの世界遺産紀行 写真・短歌」	2012.04

象記(VI)』を頂戴した。これで十冊目である。ところが、『史遊会通信』のバックナンバーを調べてみると「祝出版」として紹介されているのはその内の一部だけである。巻末に既著作の一覧表が付いていたのでここに整理して紹介する。(新井宏)

訃報 友の会会員 正木清幸氏

友の会会員の正木清幸さんが九月十一日亡くなられた。享年九十三歳。

正木さんは、史遊会創立当初から参加されており、最も古い「友の会会員」である。

氏は史遊会の活動を通じて、韓国の大ファンであり、しばしば韓国に出かけておられたが、その際に入手した著書や文献の多くを、私が頂戴している。

下山田さんが、体調を崩され、私が『史遊会通信』の編集をお引受した直後、初めてお電話を頂戴した。何か過分な言葉を頂戴したように記憶しているが、それよりもビックリしたのは、『史遊会』関係の内容をインターネットを通じてご覧になっているとのことである。当時、既に九十過ぎ、会員の諸橋奏さんとの関係のことも改めて伺った。

正木さんも『史遊会通信』にしばしば原稿をよせられていたが、一七九号では「私は史遊会のお陰で歴史に目覚め多くの素晴らしい方々に巡り合い有意義な人生を送り得た事に厚く感謝申し上げます」と結んでおられた。合掌。

(新井宏)